

オセアニアの住宅建築および住宅地計画に関する研究（梗概）

小林 克弘

序論

研究の目的と方法

本研究は、18世紀以来、短期間の内にめざましい発展を遂げたオーストラリアおよびニュージーランドにおける住宅建築と住宅地計画を研究対象とする。周知のように、オセアニアの住宅および住宅地計画は、イギリスやアメリカといった国々からの影響を強く受けながらも、豊かな自然や広大な国土といった特有の風土、気候、またそこから生まれた新たな生活様式に対応する形で独自の発展を遂げた。しかしながら、日本ではオセアニアの住宅を対象とした研究は、これまでほとんどなされていない。従って、本研究は、極めてパイオニア的な研究の範疇に属するものであるといえよう。

本研究は、実地調査および現地での資料収集を基にまとめられている。実地調査は1990年10月から11月にかけて約1カ月間、オーストラリアのブリスベン、シドニー、キャンベラ、メルボルン、ホバート、アデレード、パースといった、オーストラリアにおいて主要な地域のかかなりの部分を対象に行われ、約400件の住宅を見、かつ写真として記録した。また集めた文献資料は、書物にして100点、パンフレット類で300点を数える。これらの写真資料、文献資料は、オセアニアに関する研究蓄積がほとんどない日本において極めて重要であるといわねばなるまい。

さて、本研究テーマに関しては、様々な角度から検討、分析を進めたが、今回の梗概では、特にオーストラリアの18世紀末から19世紀末までの住宅を対象とし、その様式的発展を考察した内容を整理することにした。というのも、今後研究をいかなる方向で深めていくにせよ、オーストラリアの住宅建築の歴史的展開をまとめておくことがまずは肝心であると思われるからである。

オーストラリアの住宅に関する従来の研究では、イギリスやその他の国々からの影響については触れられているものの、個々の作品に関する造形面・様式面での分析はおおよそ不十分であった。すなわち、エントランス、窓といった構成要素や各部のプロポーショナルなどに見られる様式的特徴が、オーストラリアにどのような形で移植され、またオリジナルの作品に対していかなる変形を

見せたのかといった問題に対する考察が明快になされていないのである。

こうした立場から、本梗概では、代表的な建築家および作品を実例としつつ、具体的な考察、分析を行うことにより、オーストラリアの住宅建築の造形的、様式的特徴を明らかにしていきたい。

主な既往研究について

以下、代表的な既往研究とその評価を示す。

J. M. フリーランド著

「オーストラリアの建築」²⁾

イギリス人入植時代から、現代までのオーストラリア建築の歴史を、体系的に記述した初の研究であり、現在でも他にまとまったものが見られないだけに、オーストラリア建築の歴史についての枠組みを知るには、最も適したものであろう。

この本において著者は、「建築の歴史を示すことは、同時に、その国の歴史を示すことにもなる」という前提のもと、人々の趣味の変化、経済的な発展、といったオーストラリア社会の移り変わり、と、建築の変化との関連を明らかにしようとしている。

従って、この本の中で述べられていることは、「建築家の建築についての物語ではなく、社会における建築の歴史」であり、それ故に、個々の作品に対する造形的考察、建築家の作品に対する設計意図の考察といった意匠論的観点からの記述は十分といえない。

モートン・ハーマン著

「初期オーストラリアの建築家とその作品」³⁾

1840年代までの、初期オーストラリア建築について、著者自身の手による豊富な図版を用いながら、詳しい解説を行っている。当時の新聞、雑誌といった資料もふんだんに使われており、オーストラリア建築の歴史を研究する上で、たいへん貴重な基礎的研究である。

基本的構成は、建築家ひとりにひとつの章を対応させる形で、初期の建築家についてのプロフィールや代表的な作品などについてはひと通り網羅されている。

オーストラリアのコロニアル建築に対する評価を確立

した極めてパイオニア的な著作であり、その意味でもたいへん価値が高いといえる。しかし、初期の研究ということもあり、建築家や、建築作品の紹介が内容の中心となり、著者自身による考察が十分ではない部分も多い。

ロビン・ボイド著

「オーストラリアの住宅」⁴⁾

オーストラリアにおける住宅の流れを、様式的特徴と時代区分とを対応させながら、明快に分類して見せた著作である。各時代の代表的な住宅様式を挙げ、その意匠的な特徴を詳しく示すと共に、そこにみられる生活様式について述べている。おそらく、オーストラリアの住宅に関する初めての本格的な研究であり、ブーム様式、フェデレーション様式といったオーストラリア独特の様式名称を定着させたということでも、その後のオーストラリア住宅の研究に大きな影響を与えたといえる。

しかし、本文中にも述べてある通り、建築家に関する記述は、必要最小限に抑えてあり、どの建築家が、どのようなタイプの住宅を作ったかというような問題に関しては、十分な答えを得ることはできない。

様式の定義およびその選択について

一般に、似た特徴をもつ建築が、ある程度以上集まるとそこに様式を定義することが可能である。様式の具体的解釈については、様々な意見の相違が見られる。しかし、一般にオーストラリア建築の様式を定義するためにとられる基本的立場は、次のように示すことができる。すなわち、オーストラリア建築における様式名を考察する場合、イギリスやアメリカなどの西洋諸国との関係を見無視することは、不可能である。しかしながらオーストラリア独自の特徴を特定することも必要である。従って、基本的には国際的に共通して使用される用語に従うが、より適していると考えられる場合は既にオーストラリア国内でのみ普及している用語を用いることとした。

特に本研究は、対象となる建築作品の様式を特定することや、新たな様式名を生み出すことを目的とするわけではない。前述の立場を念頭においた上で、参考となる既往研究を比較検討しそれらの中で共通の理解のもとに基本的な様式として認められているものを採用した。

特にジョージアン、レジェンシー、ゴシック・リバイバル、イタリアネート、ブームという6つの様式は、研究の枠組みを得るものとして用いている。

ジョージアンは、入植初期から用いられた最初の様式である。レジェンシーは、1830年代から用いられた。ゴシック・リバイバル、イタリアネートの2つの様式は共にピクチャレスクの影響を受けた様式であるが、1840年代に広まった。また、ブーム様式は、1870年ころの建築ブームによって用いられた様式である。

第1章 歴史的背景

本研究が対象とする時代は、英国からの四人が初めてオーストラリア本土に上陸した1778年から、経済の破綻をきたす1893年までのおよそ110年間の期間である。この時期、イギリスでは産業革命がその最盛期を迎え、大英帝国としてもその絶頂期にあった。一方、オーストラリアにとってこの時期は、入植者たちが、本国イギリスとは異なる厳しい自然や、囚人労働にともなう程度の低い技術などを克服し、その後のゴールド・ラッシュと、それによって起きた経済発展、社会的混乱などを経て連邦結成へとむかう成長の時代であった。

すなわち、イギリスという強大な国家の植民地として、その強い影響下にありながらも、オーストラリア独自の文化が次第に形成されつつあった時代であったといえる。建築的には、110年という決して長くはない期間に、様々な様式の混在、変化を見ることができる。イギリスでは、ジョージ朝、ビクトリア朝という最も多様な趣味

■年表¹⁾

1768	ジェームス・クックの第1回南太平洋航行 オーストラリア東部領有を宣言し、ニューサウスウェールズと命名
1776	アメリカ独立
1788	ポートジャクソン内シドニー・コープに植民地開設 フィリップ初代総督に就任(～92年)
1802	マッカーサー、羊毛生産開始
1804	タスマニア(当時バンディーメンズランド)のホバートへ入植開始
1809	マックワリ総督着任(～21年)
1823	ニューサウスウェールズ、流刑植民地から英領植民地となる バンディーメンズランド独立の植民地となる
1824	ブリスベーンに入植開始
1827	シドニーで最初の建築条例施行
1829	ダーリングで総督による都市計画法が施行
1833	シドニーで二度目の建築条例施行
1835	ビクトリアのポートフィリップ湾ヤラ川に最初の入植
1836	南オーストラリアのアデレードに入植開始 ウィリアム・ライト大佐によるアデレードの計画 ロバート・ラッセルによるメルボルンの計画
1837	ビクトリア女王即位
1839	メルボルンの町を建設
1845	国内製の鋳鉄が作られるようになる
1849	メルボルンで建築条例が施行
1851	ハーグレイブズがニューサウスウェールズのバサーストで金鉱発見、続いてビクトリアのパラットなどでも金鉱発見
1853	ペリー、日本に來航
1854	最初の鉄道開通(ウィリアムズタウン～メルボルン)
1855	各植民地への自治権付与始まる
1859	クイーンズランド植民地、ニューサウスウェールズから分離
1861	土地自由化政策(ニューサウスウェールズ)や農業用土地の購入奨励実施
1875	メルボルン万国博覧会
1892	西オーストラリア州で金鉱発見
1893	金融恐慌、1～5月の間に13の銀行が営業停止となる
1901	オーストラリア連邦結成

が生まれた時代を迎えていたが、その結果、それに対応する形で、様々な建築の様式が用いられていた。オーストラリアには、そのような様式が、建築家のみならずイギリス的な趣味を求める一般の人々によっても同時に伝えられた。つまり、オーストラリアにおいては、様式とは移入され、そして変形されたものなのである。

第2章 ジョージアン様式

2-1. 様式的特徴とその背景

オーストラリアの初期入植者たちにとって、最も身近な様式とは、イギリスのジョージアン様式であった。本来、この様式は16世紀イタリアの建築家によって書かれた理論書を基に、クリストファー・レンなどが広めた様式であった。オーストラリアでは最初の恒久性を考慮に入れた住宅である最初の総督邸（Government House, Sydney : 1778）（図1）を始めとして、彼らはこの様式をより単純化した形で自らの住宅に用いた。

オーストラリアにおけるジョージアン様式住宅の大きな特徴は、全体として箱型で、立面では、開口部や、煙突などが、左右対称に配置されている。これは、基本となる建築的要素の配置や、全体の比例関係などといった非装飾的要素によって、ジョージアン様式を表現しているといえる。

しかし、本来イギリスの穏やかな気候に適したこのスタイルでは、植民地の暑さや、雨量の多さに対応しきれなかった。そのためベランダが付加され、屋根庇は広くなった（図2～3）。

2-2. ホームステッド

オーストラリアにおける住宅の歴史の中でも大きな位置を占めているのが、ホームステッドと呼ばれる富裕な牧畜業者たちの住宅である。

ホームステッドの原形を創り出した初期牧畜業者は、軍人出身であり、彼らはこの国の気候に適した住宅形式として、同じ英国植民地であるインドのバンガロー住宅（図4）を原形として持ち込んだ。インドのバンガロー住宅は、大きな屋根で覆われた1階建住宅で、その周りをベランダが取り囲んでいるものであり、例えば、最初のホームステッドであるエリザベス・ファーム（Elizabeth Farm, Parramatta, N.S.W. : 1793）（図5）のベランダは、部屋同士をつなぐ廊下として利用されたが、これはまさしくバンガロー住宅で見られる手法である。エクスペリメント・ファーム・コテージ（Experiment Farm Cottage, Paramatta, N. S. W. : c.1800）（図6）を見ても意匠的にバンガロー住宅の影響を強く受けていることがわかる。一方、半円形扇窓を載せた扉を中心として、細かく分割された窓を左右対称に配置した立面は、



図1 総督邸⁶⁾
(シドニー：1788)



図2 ロウズ・ヒル・ハウス²⁷⁾
(ウインザー, ニュー
サウスウェールズ：
1813-18)



図3 ナリナ
(ホバート：1834)



図4 インドのバンガロー住宅²⁴⁾



図5 エリザベス・ファーム
(パラマッタ, ニューサウスウェールズ：1793)



図6 エクスペリメント・ファーム・コテージ
(パラマッタ, ニューサウスウェールズ：c.1800)

ジョージアン的である。

すなわち、ホームステッドとは、バンガロー住宅と、イギリスのジョージアン様式との2つの流れを汲むオーストラリア固有の住宅なのである。

2-3. フランシス・グリーンウェイ

(Francis Greenway, 1777—1837) の住宅

グリーンウェイは、実質的にはオーストラリアで最初の建築家である。マックワリ総督の植民地政策のもとで、多くの良質な公共建築を設計した。グリーンウェイの設計した住宅は少ないが、その優れた比例感覚や、同時期の住宅と比べてより洗練されたディテールは、他に類を見ない。旧総督邸(Old Government House, Paramatta, N. S. W. : 1816) (図7) に付加されたポーチに用いられたイオニア式のオーダーは極めてルネサンス的であり、この点でも彼が、イギリスのジョージアン様式の流れを汲む建築家であることがわかる。また、セント・マシュー牧師館(St. Matthew Rectory, Windsor, N. S. W. : 1825) (図8) においても、中心のペディメントや窓回りの扱いは、当時のイギリスからの影響を強く反映しているのであるが、特筆すべきは、そのベランダの扱いである。ペディメントと幅を揃えることによって、ポーチのようにも見えるように表現しており、そこにベランダ的なポーチというオリジナルからの変形の結果を見ることができるのである。

2-4. まとめ

オーストラリアのジョージアン様式には、2つの流れが見られるのであるが、初期の住宅ではベランダの扱われ方が、そのデザインの大きな決定要因となっていることがわかる。

第3章 レジェンシー様式

3-1. 様式的特徴とその背景

オーストラリアにおけるレジェンシー様式の住宅とは、1830年代に次第に登場してきた上流階級の富を反映したものといわれている。しかし、レジェンシー様式の定義とその背景については、かなり曖昧である。レジェンシー様式と呼ばれる住宅の具体的な特徴としては、立面が、古典的なデザインのポーチを中心として左右対称にデザインされていることや、壁面はパネルのように分節されており、全面に白いスタッコが塗られていることなどが挙げられる。これが、ジョージアン様式のより洗練された様式であるという点は、共通の見方であるが、その背景に関しては、意見の分かれるところである。

そもそもイギリスのレジェンシー時代(1790—1840)とは、ナッシュによるイタリア風別荘や、ウィルキンス



図7 旧総督邸(ジェームス・ブラッドワース(?))
パラマッタ, ニューサウスウェールズ: 1800)



図8 セント・マシュー牧師館²⁷⁾
(フランシス・グリーンウェイ, ウインザー, ニュー
サウスウェールズ: 1825)

によるゴシック風住宅、また、スマークによるギリシャ風公共建築といった具合に、異なった時代のみならず、異なった文化から生まれた建築様式が同時に用いられた時期であった。このような多様な様式の影響が、オーストラリアにおけるレジェンシー様式の定義を難しくしているのである。

例えば、J・M・フリーランドは、「プリンス・レジェンシーがパトロンとなってジョン・ソーンが広めた様式が、非常に単純になったもの」として、ソーンによる強い影響をその背景としてあげている。⁵⁾

一方、ターナーおよびコックスは、オーストラリアのレジェンシー様式は、当時のイギリスに見られる様式のほとんどから影響を受けたとした上で、最も重要なのはグreek・リバイバルであるとする。しかし、その具体的影響については、述べられていない。⁶⁾

18世紀後半のイギリスでは、スチュアートやレヴェットによってアテネの遺跡調査が行われた結果、当時の建築に用いられていた誤りの多い古典様式ではなく、正確なギリシャ様式を用いようとする運動が起こった。これがグreek・リバイバルであるが、この時期のオーストラリアにおける上流階級が積極的にこのスタイルを最新のスタイルとして自らの住宅に取り入れようとしたといわれている。従って、様式の移入とその変形という観点に立つならば、グreek・リバイバルという視点から捉えることによって、レジェンシー様式に明快な様式的特徴を与える試みが可能である。

3-2. ジョン・ヴァージ (John Verge, 1782—1861) の住宅

1827年に入植したヴァージは、その洗練されたデザイン手法と建築家としてのずば抜けた能力によって当時の上流階級からの依頼を一手に引き受けた。当時としては、最も成功した建築家であり、彼の住宅はレジェンシー様式の典型といわれる。エリザベス・ベイ・ハウス (Elizabeth Bay House, Sydney : 1835) (図9) は、彼の代表作とされるが、その白く塗られた壁面や、窓回りのディテールは、レジェンシー様式の特徴を明快に示している。また、パラペットを立て、屋根を隠す手法は、当時、他の住宅には見られない最新のものであった。中央のペディメントとポーチは、初期の計画案では、建物全体を囲む列柱と太いイオニア式の柱を持った中央のポーチコとして計画されていたことがわかるが、そこにはグreek・リバイバルの強い影響を見ることができるのである。

また、ビンヤード (The Vineyard, Rydalmere, N. S. W. : 1835) (図10) に見られるドリス式列柱のディテールは、グreek・リバイバルの登場によってもたらされたものであり、ルネサンスの影響が強いジョージアン様式には見られないものである。

以上のように、ヴァージが、グreek・リバイバルを積極的に取り入れようとしたことがわかるが、それは、あくまでも一部の装飾としてのレベルで用いられている。

3-3. モーティマ・ルイス (Mortimer Lewis) の住宅

ルイスは、1835年から14年間に渡って、植民地建築家をつとめグreek・リバイバル様式の公共建築を数多く設計した。彼のデザインは、当時の出版物に負うところが大きいのであるが、植民地であるオーストラリアでは、最新のスタイルであった。ファーンヒル (Fernhill,

Mulgoa, N. S. W. : 1840) (図11) は、本来2階建てとして計画された住宅である。その分節された壁面は、まさしくレジェンシー様式の特徴である。注目すべきは、ベランダに用いられた列柱であり、ヴァージのビンヤード同様に、極めてギリシャ的なデザインが施されているのである。しかし、ここでもグreek・リバイバルは、一部分の装飾的要素として用いられているのである。

3-4. まとめ

レジェンシー様式の住宅では、当時における最新のスタイルであったグreek・リバイバル様式が、全体の支配的様式としてではなく、一部の装飾的要素として用いられていた。言い換えればレジェンシー様式とは、単にジョージアン様式が洗練されただけのものでなく、新たにグreek・リバイバルの要素が装飾として移入されたスタイルなのであった。

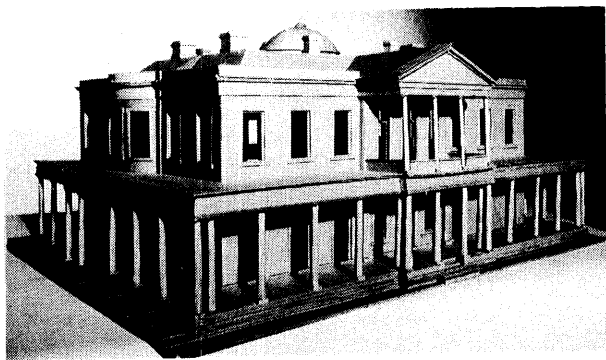


図9 a エリザベス・ベイ・ハウス初期案²⁰⁾
(ジョン・ヴァージ, シドニー)



図9 b エリザベス・ベイ・ハウス²⁰⁾
(ジョン・ヴァージ, シドニー : 1835)

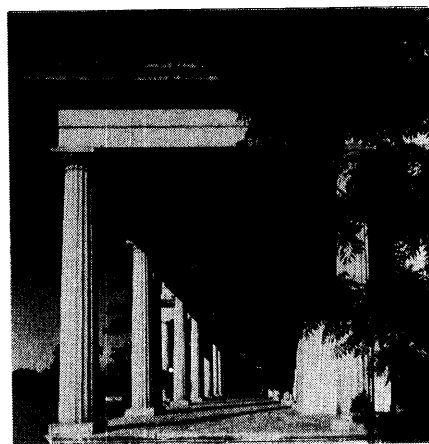


図10 ヴィンヤード²⁰⁾
(ジョン・ヴァージ, リダルメヤ, ニューサウスウェールズ : 1835)



図11 ファーンヒル¹³⁾
(モーティマ・ルイス, ムルゴア, ニューサウスウェールズ : 1840)

第4章 ゴシック・リバイバルとイタリアネート

4-1. 様式的特徴とその背景

1840年代から広く普及したゴシック・リバイバルとイタリアネートという2つの様式は、ピクチャレスク美学の影響を受けた建築家が好んで用いた。ピクチャレスクの考えでは、自然の中にある荒々しさや、不規則性、多様性などが重要であるとされたが、オーストラリアでは、このような特徴が2つの様式によって表された。

一般にゴシック・リバイバルの住宅は、破風板で装飾された切妻屋根が不規則に配置され、ドーマーや、ベイ・ウィンドウなどによってその非対称性がより強調されている。特に、初期のゴシック・リバイバルでは、浪漫主義的色彩が強く、城郭風のデザインが好んで用いられた。これは、シドニーの初期入植者たちにとっては、本国イギリスへの郷愁を誘う様式であった。

彼らは、本国よりも荒々しく雄大なオーストラリアの風景に自らの故郷の景色を重ね合わせながら、そこにボークルーズ・ハウス (Vaucluse House, Vaucluse, N. S. W. : c.1920) (図12)、リンゼイ (Lindsey, Darling Point, N. S. W. : 1835) (図13) といったゴシック・リバイバルの住宅を建てることによって、ピクチャレスクな景観を創り出そうとしたのである。

また、1837年に新しい総督邸 (Government House, Sydney.) (図14) がイギリスの建築家エドワード・プロア (Edward Blore) による城郭風デザインによって建てられると、ゴシック・リバイバルは、最新のスタイルと考えられるようになった。

一方、イタリアネートの住宅は、メルボルンでの1951年のゴールド・ラッシュを境に急増する。イタリア的な明るいデザインは、急激に成長するメルボルンの雰囲気や暖かな気候、また、新たに富を得た人々の楽天的な気分を表すのに適していると考えられたのである。

左右非対称のファサードに、ピラミッド型の屋根またはバラストレードの付いた塔が付随するのが大きな特徴で、ベランダのかわりにアーチを持ったロジヤが用いられることが多い。

イギリスにおいては、ジョン・ナッシュが、大規模なカントリー・ハウスにピクチャレスクな効果を与えるために用いたスタイルであったが⁷⁾、開発業者によってオーストラリアの一般的な住宅に広がると、そういった理論的な設計意図ではなく、様式を持つイメージが優先される場合が多くなった (図15~17)。

4-2. パターン・ブックの影響

ピクチャレスクの流れを汲む住宅の普及に大きな影響を与えたのは、パターン・ブックの存在である。当時、イギリスで多量に出版されたパターン・ブックの中には、

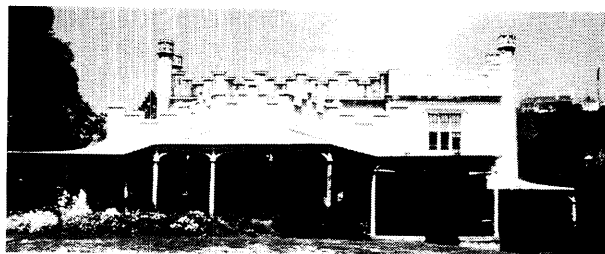


図12 ボークルーズ・ハウス
(ボークルーズ, ニューサウスウェールズ : c.1920)



図13 リンゼイ²⁾
(エドワード・ヘレン, ダーリングポイント, ニューサウスウェールズ : 1835)



図14 総督邸¹⁹⁾
(エドワード・プロア, シドニー : 1837)



図15 ウールマース¹⁹⁾
(ウィリアム・アーチャー, ロングフォード, タスマニア : 1842)

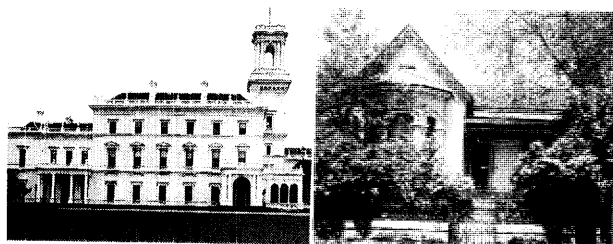


図16 ビクトリア総督邸¹⁹⁾ 図17 セント・エルモ¹⁹⁾
(ウィリアム・ワーデル, (グレーブ, ニューサウスウェールズ : 1871-76) (c.1890)

様々な建築様式の住宅が、カタログ的に掲載され、建築に関する情報の少ないオーストラリアでは、その中のデザインが用いられることも多かったのである。中でも広く利用されたのは、J・C・ルードンの「コテージ・ファーム・ビラの建築・家具百科辞典」⁸⁾であった。これを、一般の人のみならず建築家でさえもしばしば用いた。特に、カルソナ (Carthona, Darling Point, N. S. W. : 1841) (図18) は、ルードンのデザイン (図19) をそのまま用いたゴシック・リバイバルの住宅として知られている。また、ノースビュリー (Northbury, Longford, Tas. : 1862) (図20) は、典型的なイタリアネートの住宅であるが、アメリカの建築家によるパターン・ブックがそのデザイン・ソースとして用いられている⁹⁾ (図21)。

4-3. モーティマ・ルイスの住宅

第3章で示したように、ルイスはオーストラリアにギリク・リバイバルを広めた人物であるが、教会や住宅に対してはゴシック様式を用いることがあった。リッチモンド・ヴィラ (Richmond Villa, Sydney : 1849) (図22) の基本形は、ベランダ付きの箱形であり、その点ではオーストラリアのジョージアン様式に見える。しかし、1階で飛び出したベイ・ウィンドウや、煙突の位置が左右対称を崩している。また、破風板付きの切妻屋根や、尖塔アーチを意識したようなベランダ柱が用いられており、極めてゴシック的な印象を与えている。建物のマッスを変化させるのではなく、装飾的な要素の配置の仕方によってピクチャレスクの特徴を出そうとする手法がここでは見られるのである。

4-4. ジェームス・ブラックバーン

(James Blackburn, 1803-1854) の住宅

ブラックバーンは、初期のタスマニアで数多くの建築を建てた。彼は、ギリシャ神殿風の博物館や、ロマネスク風の教会などを設計したが、建築の目的に合わせて様式を選択する態度は、同時代の建築家によく見られる。住宅においてもゴシック・リバイバル、イタリアネートの2つの様式を用いた。タスマニア総督邸 (Government House, Hobart : c.1840) (図23~25) のためには、3つの案が用意されている。ひとつは、中心にコリント式のポーチコがあるルネサンス的な左右対称の案である。他の案は、ギリシャ風のデザインであるが、そのポーチコは、中心をはずされており、建物全体の構成が不規則になっている。もうひとつの案は、イタリア風にデザインされているが、これも様々な要素によって不規則さが強調されている。注目すべきは、そのスタイルの多様性ではなく、マッスの構成に見られる不規則性であろう。また、グランジ (The Grange, Campbell Town, Tas. : c. 1840) (図26) では、装飾的要素が最小限に抑えられて



図18 カルソナ
(ダーリングポイント, ニュー
サウスウェールズ : 1841)

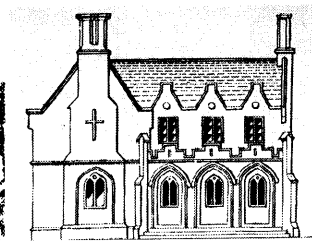


図19 ルードンのデザイン⁶⁾



図20 ノースビュリー¹⁹⁾
(ロングフォード, タスマニア :
1862)



図21 パターンブック⁹⁾
のデザイン

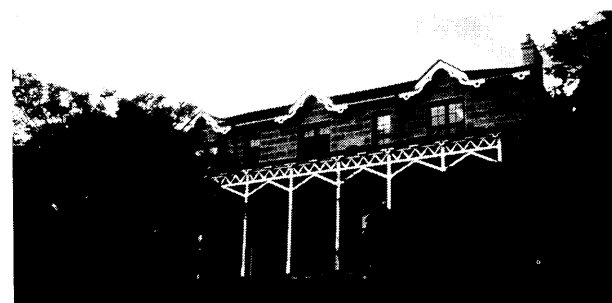


図22 リッチモンド・ヴィラ
(モーティマ・ルイス, シドニー : 1849)

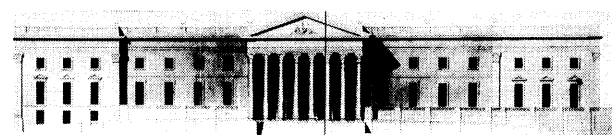


図23 タスマニア総督邸案¹²⁾
(ジェームス・ブラックバーン, ホバート : c.1840)

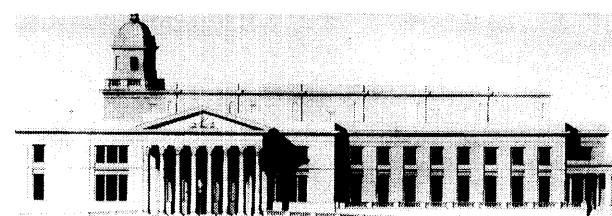


図24 タスマニア総督邸案¹²⁾
(ジェームス・ブラックバーン, ホバート : c.1840)



図25 タスマニア総督邸案¹²⁾
(ジェームス・ブラックバーン, ホバート : c.1840)

いるにもかかわらず、ドーマーや切妻屋根を持ったマッス非対称な配置によってその様式をゴシック・リバイバルとして特定することができる。以上のように、ブラックバーンにとってはピクチャレスクの手法こそが第1の設計原理であり、それは装飾的要素によってではなく、建物を構成する基本的なマッスを不規則に配置することによって、得られるものなのである。

4ー5. まとめ

オーストラリアの住宅ではピクチャレスクな効果を得るため、単純なマッスに装飾的要素で変化を付ける手法による住宅と、少ない装飾でマッスの構成に変化を付ける手法による住宅という正反対の例を見ることができる。

第5章 ブーム様式

5ー1. 様式的特徴とその背景

ゴールド・ラッシュ後のメルボルンで起きた人口の増大とそれにともなう郊外の広がりは、住宅需要の増大を引き起こした。その結果起きた建築ブームは、1870～1880年代をその絶頂期として多くの土地成金を生んだ。彼らは、その富の象徴として立派な住宅を建てたが、そこに新奇さや贅沢さを求めたため、イタリアネートを中心としてロマネスク様式、第2帝政様式など多様な様式の特徴を持つ折衷主義的なものとなった(図27～29)。

これが、ブーム様式と呼ばれる住宅の始まりである。ブーム様式という様式名を定着させたのは、おそらくロビン・ボイドであるが、彼に従えば、具体的な定義は次のようなものになるであろう。すなわち、イタリアネートを基本としながらもファサードの装飾は、より豪華になり、スレート屋根はスタッコを塗った手すり子付きハラペットによって隠される。また、茶色、赤、クリーム色の煉瓦によるパターンが用いられる。铸铁製のベランダ、茶色のベネチアン・ブラインドや、入口回りの派手な色付きガラスのパネルが用いられることが多い、などである¹⁰⁾(図30)。しかし、この定義は、大規模な住宅をその先例として開発業者などによって大量に造られた比較的小規模な住宅を対象としている。また、そこに使われる様式がどのようにオーストラリアへ移入されたのかという考察がなされていない。従って本章では、まず第一にブーム様式の原形である大規模な住宅作品に様式がいかなる形で導入されたのかを具体的に考察してみる。

5ー2. ジョセフ・リード (Joseph Reed, 1722—1890) の住宅

リードはメルボルンで最も成功した建築家である。ゴールド・ラッシュ後のメルボルンに建った主な公共建



図26 グランジ
(ジェームス・ブラックバーン、キャンベルタウン、タスマニア：c.1840)



図27 マリティモ²⁸⁾
(ウィリアムズタウン、ビクトリア：1885)



図28 イラワラ
(トゥーラック、ビクトリア：1890-91)

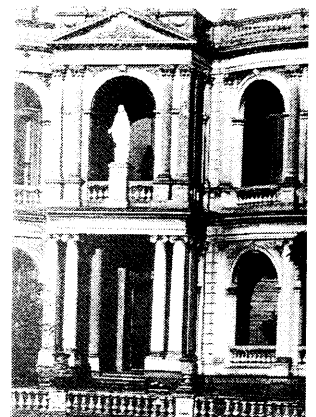


図29 マンデヴィル・ホール²⁸⁾
(トゥーラック、ビクトリア：1877)

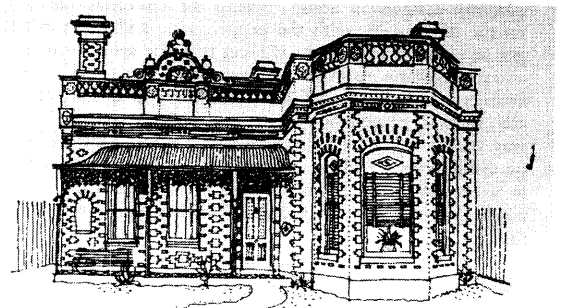


図30 ボイドによるブーム様式の例⁴⁾

築のほとんどは、彼の手によるものである。従って、彼に住宅の設計を依頼できたのは、一部の成功した人々で

あった。ホッジキンソン邸 (Hodgkinson House, East Melbourne, : 1861) (図31) は、ブルーストーンで作られたテラスハウスの一部である。ベランダの屋根を切妻型にすることによって、テラスハウスをゴシック・リバイバル様式に見せるという極めて稀な試みを見せている。また、ベランダや入口の上に四つ葉型の装飾が用いられているが、他の住宅には見られないものである。リップンリー (Ripponlea, Melbourne, : 1861) (図32) では、外壁の多色煉瓦積みや、半円アーチのアーケードに、ロマネスクの影響が見られる。これはリードが、1863年にイギリスを中心としてヨーロッパ旅行を行い、そこでラスキンによる中世イタリア建築に対する賛辞の影響を受けたためである。ロマネスクの手法を最も早い時期に取り入れたのが、この住宅であった。以上のように、リードは、同時代の建築家の中でも極めて優れたデザイン能力を持った建築家であり、新しいデザインを積極的に取り入れることができた。

5-3. J. A. B. コッホ (J. A. B. Koch) の住宅

コッホは、ドイツ生まれの建築家であり、メルボルンに数多くの豪華な住宅を設計した。ラバッサ (Labassa, Caulfield, Vic. : 1890) (図33) は、彼の代表作として知られている。この住宅で最も特徴的なことは、そこに第2帝政様式が導入されていることである。第2帝政様式は、ナポレオン3世治世下 (1852~1870) のフランスで用いられた様式としてヨーロッパおよびアメリカで広まった。彫刻的な装飾によって飾られたラバッサには、この様式の代表的な特徴であるマンサード屋根や、アーケード、パラペットの手すりなどが用いられている。また、オクスフォード (Oxford, Hawthorn, Vic. : 1880) にも同様な特徴が見られる (図34)。この様式は、ホテルや公共建築に使われることが多かったのであるが、その豪華さや、派手さ故に莫大な富を得た人々の住宅には、適したスタイルであると考えられたのである。

5-4. まとめ

ロマネスク様式や第2帝政様式は、建築家の手によって、その作品に支配的な様式として導入されたことがわかる。

結論

以上のように多様な様式の移入とその変形の過程、およびそこに見られる手法の例を、オーストラリアの住宅に見ることができた。

第2章では、イギリスのジョージアン様式という固有の様式が、バンガロー住宅の意匠的特徴や、ベランダといった新たな建築言語によって変形される例を見ること

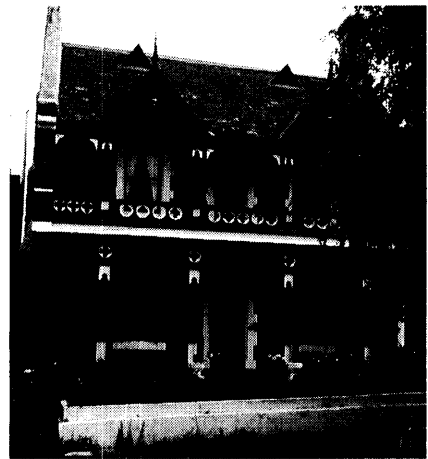


図31 ホッジキンソン邸
(ジョセフ・リード, イースト・メルボルン : 1861)



図32 リップンリー
(ジョセフ・リード, メルボルン : 1861)

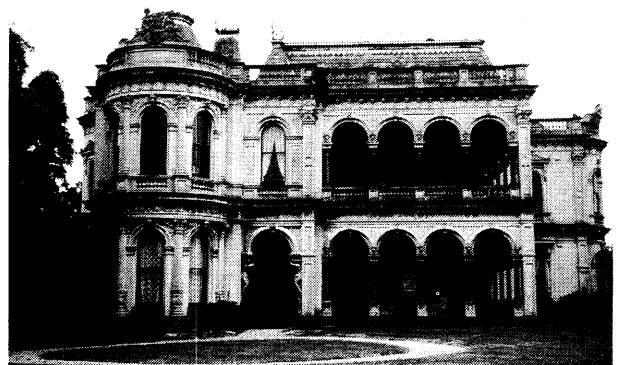


図33 ラバッサ
(J. A. B. コッホ, カウルフールド, ビクトリア : 1890)



図34 オクスフォード
(J. A. B. コッホ, ホウソーン, ビクトリア : 1888)

ができた。そこには、本国イギリスとは異なる厳しい自然が、初期の住宅のデザインに対し強い影響を与えたことが示されている。

第3章および第5章では、結果的にオーストラリア固有の様式に吸収されるスタイルが、どのように移入されたのか、異なる2つの例が示された。レジェンシー様式は建築家を中心として広められ、グリーク・リバイバルが装飾要素としてこの様式に導入されて、その特徴的要素となった。一方、ロマネスク、第2帝政様式は、建築家の特定の住宅に支配的な要素として導入されたにもかかわらず、開発業者等によって広められたブーム様式の一部として吸収された。

これは、レジェンシー様式の時代は、建築家を中心とした一部の人のみが、建築デザインを意識的に行っていたが、ブーム様式の時代になると、その役割が開発業者などの登場によって薄らいできたことを如実に反映している。

第4章の結果は、オーストラリアに移入された設計理論が、いかなる手法によって表現されるに至ったかという問題に関するひとつの例を示している。具体的には、ピクチャレスクの効果を得るための手法として、装飾的要素を用いた例（モーティマ・ルイス）と、マッスの構成を利用する例（ジェームス・ブラックバーン）という2つの全く正反対な例を見ることができた。そこには、発展途上にある植民地オーストラリアの低い技術力を克服するために単純な手法によって、最大限の効果を得ようとする共通の設計意図を見ることができる。

一般に、オーストラリアの住宅は、イギリスなどに見られる住宅が単純になったものとして一元的に考えられがちであった。しかし、そこには、意識的または無意識的に自らが覚えてきたスタイルをその出発点としながらも、新しい環境にあうスタイルを模索しようとする積極的な意志が見られるのである。従って、アメリカや他の植民地とは異なる独自の様式的発展が、見られることが判明した。

今後、こうした歴史的分析を踏まえながら、より広い視点からオーストラリアの、ひいてはオセアニアの住宅建築および住宅地計画に関する研究を深めていきたい。

<注、図版出典および主要参考文献>

- 1) この年表は、マニング・クラーク著、竹下美保子訳「オーストラリアの歴史」、サイマル出版会、1978、を参考にして作成した。
- 2) FREELAND, J. M., *Architecture in Australia : a History* (Cheshire, Melbourne, 1968, reprint Penguin Books, 1972)
- 3) HERMAN, Morton, *The Australian Architects and Their Works* (Angus and Robertson, Sydney, 1954)
- 4) BOYD, Robin, *Australia's Home* (Melbourne University Press, Melbourne, 1960, reprint Penguin Books, 1968)
- 5) 前掲書 2) p.75
- 6) TANNER, Howard, COX, Philip, BRIDGES, Peter and

BROADBEND, James, *Restoring Old Australian Houses and Buildings : an Architectural Guide* (Macmillan, Melbourne, 1975) p.44

- 7) 例えば、Cronhill, Shropshire, c.1802など。
- 8) LOUDON, J. C., *An Encyclopedia of Cottage, Farm, and Villa Architecture and Furniture : containing numerous designs for dwellings, from cottage to the villa, including farm houses...* (London, 1833, 1836, 1842 etc.)
- 9) VAUX, Calvert, *Vills and Cottages* (Harper and Brothers, New York, 1857, reprint Da Capo Press, New York, 1968)
- 10) 前掲書 5) p.63
- 11) BOYD, Robin, *The Australian Ugliness* (Cheshire, Melbourne, 1960, reprint Penguin Books, 1963)
- 12) TANNER, Howard (ed.) *Architects of Australia* (Macmillan Australia, Melbourne, 1981)
- 13) IRVING, Robert (ed.) *The History and Design of Australia* (Oxford University Press, Melbourne, 1985)
- 14) DUPAIN, Max and HERMAN, Morton, *Georgian Architecture in Australia* (Ure Smith, Sydney, 1963)
- 15) Australian Council of National Trusts, *Historic Houses of Australia* (Cassell, Melbourne, 1974)
- 16) Australian Council of National Trusts, *Historic Homesteads of Australia* (Cassell, Melbourne, 1969)
- 17) Robertson, E. Graeme, *Early Buildings of Southern Tasmania, 2 VOL.* (Georgian House, Melbourne, 1970)
- 18) KERR, Joan and BROADBENT, James, *Gothick Taste in the Colony of New South Wales* (The David Ell Press, Sydney, 1980)
- 19) APPERLY, Richard, IRVING, Robert, and REYNOLDS, Peter, *A Pictorial Guide to Identifying Australian Architecture : Styles and Terms From 1788 to the Present*, Angus and Robertson, Sydney, 1980)
- 20) BROADBENT, James, EVANS, Ian, LUCAS, Clive, *The Golden Decade of Australian Architecture : the Works of John Verge* (the David Ell Press, Sydney, 1978)
- 21) ELLIS, M. H., Francis Greenway (Angus and Robertson, Sydney, 1949)
- 22) BURN, Margy (ed.), *The Most Useful Art : Architecture in Australia 1788-1985* (catalogue, The Library Council of New South Wales, Sydney)
- 23) BROADBENT, James, *Colonial Greek : the Greek Revival in New South Wales 1810-1850* (catalogue, The Historic Trust of New South Wales, Sydney, 1985)
- 24) King, Anthony, D., *The Bungalow : the Production of a Global Culture* (Routledge and Kegan Paul, London, 1984)
- 25) SUMMERSON, John, *Georgian London* (Pleiades Books, London, 1945)
- 26) DIXON, Roger and MUTHESIUS, Stefan, *Victorian Architecture*, (Thames and Hudson, London, 1978)
- 27) The State Planning Authority of New South Wales, *Historic Buildings, Windsor and Richmond*, State Planning Authority of N.S.W., 1967
- 28) WILSON, Granville and SANDS, Peter, *Building A City, 100 Years of Melbourne Architecture*, Oxford University Press, Melbourne, 1981

<研究組織>

主査	小林 克弘	東京都立大学工学部建築学科 助教授
委員	佐々木龍郎	東京都立大学大学院博士課程
"	姜 鎬元	東京都立大学大学院博士課程
"	中沢 健	東京都立大学大学院修士課程
"	安藤 貴昭	東京都立大学大学院修士課程
"	岡本 美樹	東京都立大学大学院修士課程